



A・I・I・O・T時代の経営資源

国際社会経済研究所
(NECグループ)主任研究員



松永 統行

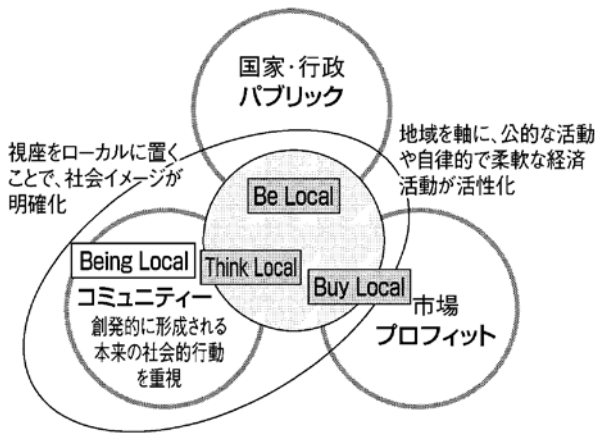
エコビレッジの共同創設者でもあるリス・ウオーカーの著書『住みたい街を自分でつくる』にも詳しい。

的な米国の二つの街を紹介する。
ローカル優先

共有で知能化
会員制交流サイトの信頼関係やネットワ
(SNS)の情報空間を資本と捉える概
の知能化により、コミュニティ活動高度
ユニティ活動を高度にシフトし、
化すれば、ヒト・モノから共有型にシフトし、
・カネ・情報という経そこに知能化が進む
営資源を社会関係資本と、自分たちの在り方
の形成へ向けて遷移させ、未来を協動的に議論
せていくことも可能でしながら、柔軟に変革
ある。社会関係資本を続けるコミュニティ
(ソーシャルキャピタル)とは、人間の協調を具現化する存在にな
行動を活性化させる社会の形だ。今回は先駆

地域軸に社会資本形成

イサカの進化するコミュニティ機構



(Being Local) 民とサイエンティストが一体となり、自分たちの街の未来が議論される。

街の未来議論

大都市にもコミュニティ主導の活動が生まれている。シカゴのA o T (アレイ・オブ・シングス) という市民を巻き込んだ活動がある。市街に複合的なセンサーを配備し、街の状況をデジタル化する。同時に、人工知能(AI)によって空気が汚染や渋滞、洪水など、街のあらゆる問題を、市民全体で共有し全方向的な解決を目的とするI o T (モノのインターネット) の次世代を提唱した活動である。米シカゴ大学が運営するアルゴンヌ研究所の呼びかけにより市

(金曜日掲載)